横浜市史資料室　City of Yokohama Municipal Archives Reference Room

市史通信

【目次】
●横浜の二宮金次郎像（二）
●市民の娯楽場映画館
●昭和二〇年代初期の史蹟めぐり
●横浜国際婦人会（Yokohama International Women's Club）
●閲覧資料紹介
横浜カオスの中に文化をさぐる
―横浜市民特性の基礎調査―
●市史資料室たより

戦前期に建立された二宮金次郎像（横浜市史資料室所蔵写真、No.27748）

第42号
【発行日】2021年11月30日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
so-sisiriyou@city.yokohama.jp
【ホームページ】
https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/gaiyo/shishiryo/

横浜の二宮金次郎像（二）

はじめに

☆夜、二宮金次郎の目が光って歩きます。（神奈川県横浜市　T・S　9歳　女子）

これはポプラ社が一九九四年に刊行した『学校の怪談スペシャル2「真夜中の金次郎」って、いったい何…？』に、横浜の女子小学生が投稿したうわさ話である。一九九〇年代の小学生にとって、二宮金次郎像（以下、金次郎像）はなぜ学校にあるのかよくわからない像であり、夜中には動き出してもおかしくない不気味な存在となっていた。この本では学校の石や像に関する怪談が掲載されており、金次郎像に関係する話だけでも三二都府県八四市区町村から合計九一件の投稿があった。

しかし近年では、学校の金次郎像が老朽化などにより撤去されることも多くなっている。たとえば二〇一一年夏、滋賀県大津市のある小学校の玄関前にあった金次郎像が倒れた。像は地元の自治連合会と学校の協議により復元することになったが、校長室への「隠居」が決まったという。この件について同校の教員は「努力を尊ぶ姿勢は受け継ぎたいが、子どもが働く姿を勧めることはできない」、教育委員会の担当者は「戦時教育の名残という指摘や『歩いて本を読むのは危険』という保護者の声もあり、補修に公費を充てるのは難しい」と語った（『毎日新聞』二〇一二年一月二五日、大阪夕刊）。「負薪読書」の構図をとる金次郎像の姿は、現代の教育にそぐわず、歩きスマホを助長しかねないとの意見も出たのである。

その一方で、長く学校に立ち続けてきた金次郎像は、地域や学校の歴史を伝える「記憶遺産」としての意味を持つようにもなっている。栃木県足利市では二〇二一年八月、東日本大震災により倒壊した金次郎像が一〇年ぶりに再建された。この像のあった学校は一九九六年に閉校して民俗資料室となったが、像は地元の有志の尽力により復活した（『毎日新聞』二〇二一年九月九日・一〇月四日、地方版・栃木）。閉校した学校の金次郎像が東日本大震災で壊れたものの、地元の人々によって修復された事例は、宮城県石巻市でも確認できる（『毎日新聞』二〇一七年二月一四日、東京朝刊）。金次郎像をめぐっては現在もさまざまな人の思いが交錯しているのである。

今回はそのことに思いをはせながら、横浜の小学校に金次郎像が建てられた時期のことをとりあげる。各校の金次郎像は、どのようなねらいと準備のもとに建てられたのだろうか。そして、子どもたちは金次郎像にどのような思いを持ったのだろうか。この問いをもとに、金次郎像建立に関する学校の記事や児童作文をみていきたい。

一、金次郎像はどのように建ったか？

まず、各地の学校はどのようにして金次郎像の建立を決めたのだろうか。

この点に関しては浦島小学校の記録が参考になる。同校では一九三五年七月に木像を建てたが、その実現までにはさまざまな「美談や苦心談」があったという。その始まりは一九三三年七月、「児童の自治会役員会席上で私達の学校養精神である『勤労』の御手本となる人、私達の心を磨き養ふのによい導きをして下さる偉人をお祭りしたいといふことが議題となつた」ので、「それを全校生徒にはかつて『私の心からえらいと敬つてゐる人』といふ調をした結果、二宮金次郎先生に決定した」ことにある。ここで二宮尊徳の存在は、「至誠の人。勤労の人。徳と熱と力の人。しかも我が郷土の偉人、世界の偉人」と位置づけられていた（「二宮先生木像建設純情美談」『武相教育』第六九号、一九三五年一二月、神奈川県教育会）。

浦島小学校は報徳教育を積極的に取り入れた学校で、除幕式の際に校長は「報徳の道こそは教育勅語の御聖旨にそひ奉るの道であると思ひます」「第二の二宮尊徳先生、第三の二宮尊徳先生が児童の中から大勢現れて、天皇の御為、御国のために真心を捧げて世界的の偉人になっていたゞけることを待っています」と激励していた（『横浜市史Ⅱ』第一巻上、一九九三年、一一七九頁）。

一九三五年は二宮尊徳の生誕一五〇年、没後八〇年の節目と考えられており、これに前後して横浜の各校では金次郎像を建てるための準備を進めた。

一九三五年一〇月に金次郎像を建てた滝頭小学校は、「今や国を挙げて国体観念の明徴に、国民精神の作興に、教育報国に精進する時、たま〳〵郷土の偉人二宮尊徳先生の八十年祭に当り、先生の徳行業績は益々敬仰追慕の情に堪へない所があります。そこで昨年十月職員児童相諮つて銅像建設の計画を樹てました」と報告している（『校報』第四号銅像建設記念号、一九三五年一二月、安室吉弥家資料一〇二六）。

また同年一二月に金次郎像を建てた大岡小学校の教師は、「今回尊徳先生の銅像を建設したのも、実に児童をして朝夕翁の銅像に接せしめ、背負へる柴、手にせる本の教を、児童訓育上多分に導入し度く希ふが為であります。我が神奈川県よりかゝる偉人を出だし、己が学の庭に尊徳先生の銅像を有する本校児童は、実に至幸至福だ」と語っていた（『おほおか』第四号、一九三五年一二月、安室吉弥家資料九八〇・九）。

他にも、一九三六年一〇月に金次郎像を建てた横浜小学校では、「二宮尊徳先生ハ本県出身ノ世界的偉人デアル昭和十年ハ丁度先生ノ八十回忌ニ相当スルノデ本校ハ其ノ記念ノ一トシテ御像ノ建設ヲ企テタ」としている（『学之友』第一〇九号、一九三七年三月、横浜小学校関係資料四）。金次郎像は道徳教育と結びつき、地元出身の偉人である二宮尊徳の少年期を見習わせようとする意図を宿していた。

ところで、金次郎像を建てる費用は、学校の年間予算から捻出できないものだったようである。そのために、像の費用は学校に通う生徒とその保護者、そして地域の人々の努力によって集められた。横浜小学校では、「報徳精神の実践」として一九三五年一〇月から「満一ヶ年間、毎月の二十日を中心に、児童の持ち寄りました銀紙・チュウブ・アルミニウム・節約金を集め、教育奨励会よりの御奨励をも戴いて、校庭の後に建設いたしました」と報告している（前掲『学之友』第一〇九号）。

浦島小学校では、「むだ遣いを止めて報徳貯金をいたしませう」と、各自が報徳袋をつくって一銭二銭と拠出しあった。またこの実践を聞いて奉公に出たり、海軍工廠で見習工となった卒業生がそれぞれの小遣銭や建艦慰労の下賜金を寄附するなどの「美談」もうまれたという（前掲「二宮先生木像建設純情美談」『武相教育』第六九号）。

金次郎像建設のために節約による拠金や不用品の回収などが行われ、それを保護者や地域の人々も支えていた。その過程は学校や地域の個性を反映しており、一九三三年一二月に金次郎像を建てた城郷小学校では「子供たちが鯊（はぜ）やくつわ虫、菊野菜などを売ったその金」を費用に充てたという（『横浜貿易新報』一九三三年一二月二四日）。

このように、各校は地域ぐるみで一年以上の時間をかけて資源回収や拠金を実施しただけに、金次郎像の建立にかかる費用は詳細に報告された。例えば一九三七年三月に金次郎像を建てた岡野小学校では、一年三ヶ月の「職員児童の誠心こめての献金不用物献納及び篤志家の寄付等」により七三七円〇二銭の収入があったことを、銅像・基礎コンクリート・除幕式費・記念品・印刷代などの支出と共に報告している（『岡野小学校開港十七年学校記録』、岡野小学校資料十七）。金次郎像の建設は、子どもたちに道徳的な生活をさせる訓練としても実践されたのである。

【写真1】像のために銀紙や金属を収集する横浜小学校の生徒
（『学之友』第107号、1936年3月、横浜小学校関係資料No.4）

二、子どもは金次郎像をどうみたか？

それではそれぞれの学校に金次郎像が建ったことを、当時の子どもたちはどのようにみていたのだろうか。

『横浜貿易新報』は一九三五年九月、神奈川県の小学生を対象に「二宮尊徳翁に関する懸賞論文」を募集した。この企画は一大センセーションとなり、締切の一〇月五日までに三百余の作文が投稿された。そして優秀賞をとったのは、浦島小学校の尋常三年生の作文であった。この作文は、「二宮先生は我が神奈川県小田原の近くに、お生まれになったえらい人です。今小田原で二宮神社にまつられてゐます。先生は小さい時から孝行で、よくはたらき、その上苦しい中でも一生けんめいに勉強しました」と書き出し、修身の時間にならったさまざまな場面を自分の気持ちとあわせて見つめたうえで、「僕は学校で二宮先生のもくぞうを拝むたびにお修身で習ったことを思ひ出します。そしてなみだがこぼれて、ひとりでに頭が下ります。そして僕は『えらい日本人になります』と心の中で二宮先生のもくぞうに申します」と結んでいる（『横浜貿易新報』一九三五年一〇月一〇日・一一日。『横浜市史Ⅱ』第一巻上、一一七七頁に全文の引用がある）。

【写真２】豊岡小学校における金次郎像の除幕式、1940年２月11日
（『わたしたちの学校　豊岡小のあゆみ』1984年、38頁より）

また佳作に入選した戸部小学校尋常六年生の作文は、「僕達の学校にも先生の銅像が立ちました」「僕達があつめた、銀紙やビール瓶や新聞紙などを、持って来てそのお金でつくつたのです。これこそは苦心の結晶なのだと思ふ時、二宮先生の銅像が一そう尊く思へてならない。このビール瓶や新聞紙や銀紙をはこぶ時には大変重かつた。しかし僕は『これが先生の銅像になるのだ』と思ふと胸はおどり元気ではこんだ」と記している（『横浜貿易新報』一九三五年一〇月一三日）。同じく佳作となった根岸小学校尋常六年生の作文は、「此の大偉人を生んだ地、神奈川県にいま住んでゐる僕等の名誉を考へます。そして僕らの事業は又此の地に第二第三の二宮先生を生むことです」と語った（『横浜貿易新報』、一九三五年一〇月一五日）。子どもたちは金次郎像を、修身の教えや自身の労苦とともに実感をもってうけいれようとした。これらの作文からはそのことを確認できるだろう。

この懸賞企画に多数の作文が集まった背景には、各校が綴り方の時間に金次郎像に関連する作文を生徒に書かせていたことが関係している。当時の学校刊行物にはこれにかかわる作品がよく見られるからである。

たとえば滝頭小学校の『校報』第四号は銅像建設記念号であり、掲載されている四三の作文のうち二〇作品が二宮金次郎関係であった。ここには尋常二年から六年まで各学年の作文が載っており、尋常二年の作文は除幕式の様子を次のように書いている。「ぼくたちは二宮金次郎先生のどうぞうをつくるために、きよ年の十月から銀紙をあつめたりお金を出したりしました」「そして十月の二十日にじよまくしきをいたしました。花火が上がるとみんなうんどうばへならびました。しきがはじまると六年生が白と赤のまくをあけました。それからかんぬしさんがおそなへものをして、のりとをおあげになりました。次にいろ〳〵のおはなしがありました。あとでぼくたちはおくわしとどうぞうのしやしんをもらつてかへりました。ぼくはこの金次郎先生のやうによくべんきやうしてりつぱな人になりたいと思ひます」（前掲『校報』第四号、一九三五年一二月）。金次郎関係の作文は、学年を重ねるにつれて修身で紹介される説話や具体的な表現などを豊かにしていく。しかし、尋常二年の段階からすでに「よく勉強して立派な人になる」という理念のモデルとして、金次郎少年の姿が印象づけられていたのである。

おわりに

今回は一九三〇年代、横浜の各校に金次郎像が建つまでの経緯をまとめ、またそれを当時の子どもたちがどうみていたのかを確認した。新聞や校報に掲載される作文は「よい子」による模範的な作品ではある。しかしそれだけに、これらの児童作文は当時の教師や大人たちがどのような認識をよしとしたのかを垣間見せる資料でもあるだろう。

今回は資料不足により、戦時期以降の金次郎像の動向をたどることはできなかった。戦時下の金属回収により銅像が撤去され、学校によっては石像に代替される過程を子どもたちはどう見ていたのか。また金次郎像の中には戦後に建てられたものもあるが、それらはどのようにして学校の中に建ち、またそれを子どもたちはどう見ていたのか。これらについては今後解明するべき課題として、ひきつづき調査を重ねていくことにしたい。

（金耿昊）

市民の娯楽場映画館

高度経済成長期にテレビが普及するまでは、映画が「娯楽の王様」であった。そして、映画館は、市民の娯楽場として賑わいを見せた。映画館では、映画だけでなく、実演として舞踊や音楽、浪曲・漫才などの上演もあった。一時は、ナイト・ショーと称して、夜九時以降に映画や実演を上演し、好評を博したこともあった。戦前・戦後を通じて映画館は、半日あるいは一日を過ごせる娯楽場だったのである。

戦前の映画館

では、横浜の人びとは実際に、どのように映画館に通っていたのだろうか。日記の記述をもとに、見る側の視点で、市民にとっての映画館を探ってみたい。

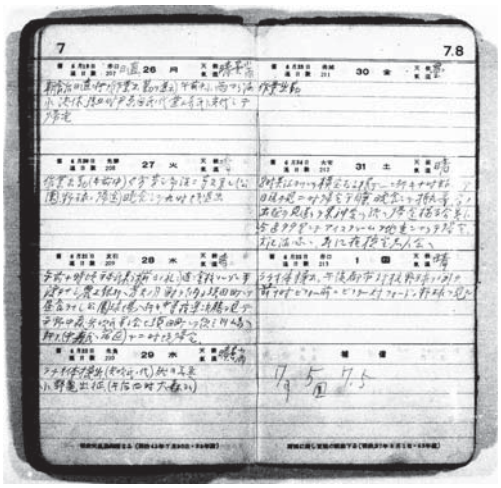
映画の製作や興行の歩みについては、佐藤忠男『日本映画史』全四巻（岩波書店、一九九五年）などがあり、横浜の映画館と映画に関しては、『シネマ・シティ―横浜と映画―』（横浜都市発展記念館、二〇〇五年）があるので、詳しくはそれらを参照願いたい。

横浜の映画館も、関東大震災で大きな被害を受けたが、映画館はいち早く復興した。また、伊勢佐木町の演劇を主とした劇場は、その頃から次々と映画中心となり、さらに保土ケ谷区・神奈川区・鶴見区などにも、映画館ができていった。こうして、昭和戦前期から戦後にかけて、映画館は全盛期を迎えていくのである。

一九三七（昭和一二）年、日中戦争が始まった年から、戦後一九五〇年まで一三年間に渡って記された日記が残されている。小学校の教員で、後に神奈川県の嘱託職員となった川口金太郎の日記である（横浜の空襲と戦災関連資料、一部『横浜の空襲と戦災2　市民生活編』横浜市、一九七五年に抄録）。川口が五〇歳代から六〇歳代の日記であり、妻や子どもたちに関する記述も多い。つまり、家族の記録にもなっているのである。

戦前期について、その川口家の人びとの、映画館通いの様子を見てみよう。その頃、川口金太郎は子安小学校訓導で、子安通に住んでいたようだ。最初の映画館に関わる記述は、息子芳夫が一九三七年一月一七日に横浜宝塚劇場に行ったというものである。金太郎自身は、同三〇日にオデオン座の浪曲大会に行っている。映画でなく、実演である。

四月二七日、金太郎は妻と娘二人を伴って朝日座へ行った。朝日座とは、元賑座が関東大震災前に映画中心に転換した映画館である（小柴俊雄『横浜演劇百四十年―ヨコハマ芸能外伝』ケー・エス・シー、二〇〇一年）。七月三日の土曜日には、知人と公園球場に野球を見に行った後、伊勢ブラをして酒を飲み、朝日座を見たと書いている。



川口金太郎日記　1937（昭和12）年7月
7月31日の記述が右中断にある。
横浜の空襲と戦災関連資料

その四日後の七日は、日中戦争開戦の日であったが、金太郎は仕事終わりに知人と伊勢佐木町へ行き、酒を飲み、金港ホールを見物して深夜一時に帰ったと書いている。金港ホールとは、ダンスホールである。満州事変以来、戦争状態が続いていたためか、開戦と聞いても緊迫感は薄い。

同三一日、土曜日は忙しい一日だった。朝八時から娘美江を連れて、横浜宝塚劇場のお子様デーに行く。二九日から始まった三日間の催しで、ニュース・漫画・実写・短篇等を上映、お土産つきだったという（『横浜貿易新報』七月二五日）。一〇時半に終わると、さらに横浜日活映画劇場に入り、いったん帰宅した。夕食後、金太郎は出征見送りで東神奈川駅まで行く。

一方、もう一人の娘春江は、夜六時開演の横浜宝塚劇場東宝名人会に行った。これは、お子様デーと同じ三日間、夜の部として開催された。落語・浪曲・講談・舞踊・水芸、さらに「怪談牡丹灯籠」などが上演された（同前）。この日一日を、家族ぐるみで映画館で過ごしたことになる。

日中戦争開戦後、金太郎の日記でも、出征見送りや戦死者の出迎え、区民葬などの記述が増えていく。金太郎は、七月から年内、一三回の出征見送りに参加している。八月一六日などは、昼過ぎと夕方の二回見送り、夕方は鶴見駅まで行っている。一方、同じ期間に、川口家の人びとは、七回映画館に行っている。戦争が周辺に迫っても、日常の生活は変えないということが、日記からうかがえる特徴ともいえる。

ニュース映画

日中戦争開戦後、享楽的なカフェー・バーやダンスホールの自粛ムードが高まる一方、映画館だけは好調だった。その要因の一つが、ニュース映画専門館の盛況ぶりで、「押すな押すなの盛況で、事変前と比べていづれも二、三割の大増収」という（『横浜貿易新報』一〇月六日）。

昭和初期から、各新聞社などが次々とニュース映画を制作するようになり、日中戦争開戦はその注目度を一挙に高めた。一九三七年七月に、伊勢佐木町の花月ニュース劇場開場が報じられている（『横浜貿易新報』七月三日）。時期的に偶然日中戦争開戦と重なったが、

以前からニュース専門劇場開場の動きが横浜でも始まっていたのである。

花月では、東日国際ニュース・朝日世界ニュースの他、パラマウントニュースのような外国のニュース映画も上映し、さらに「喜劇特選漫才陣」のような余興・実演も上演された。花月ニュース劇場は予告通り、七月一五日に開場され（『横浜貿易新報』七月一五日）、川口家では一〇月二日に芳夫が花月ニュースに行っている。この日、金太郎と子ども三人は伊勢佐木町に買物に出かけ、靴を買った。その後、芳夫一人が別れて花月に行ったのである。

この後、川口家の人びとも、足繁くニュース劇場に通うようになった。ニュース劇場へ行った、あるいはニュースを見たと明記されている日は、一一月に三回、翌一九三八年に年間八回、三九年には七回あった。他に花月劇場・横浜宝塚劇場など映画館に行ったと記されている日も、三八年に一一回、三九年も一〇回を数えた。その際にも併映のニュース映画を見ただろう。

また、三八年二月一八日はオデオン座でナイトショー、四月二〇日は神奈川電気館（青木町）で漫才、八月二日は再び横宝お子様デーと、映画だけでなく実演・催しも楽しんでいた。

戦時下の映画館

一方、一九三八年には、戦時色がはっきり現れてくる。たとえば、二月一〇日、妻と姉は菊水館（生麦町）での出征軍人家族慰安映画に行っている。また、一二月一八日、菊水館に金太郎が美江を連れて見に行った「五人の斥候兵」は、日中戦争を描いた戦争映画である。

日記の記録では、出征見送りは一九三八年に一四回、三九年に七回を数えている。区民葬も、三八年には一〇回参加したと記されている。しかし、その一方で、川口家の人びとは、相変わらず伊勢佐木町へ買物に行き、月に一～二回は映画館に入り、金太郎は伊勢佐木町界隈の店でお酒を飲んでいる。

ところが、一九四一年に入ると、個人的な買物や楽しみに関わる記述はほとんど見られなくなる。映画に関しては、一九四〇年八月二九日の横浜宝塚劇場での銃後後援映画の後は、四二年八月二五日の花月劇場、四四年末のニュースという記録があるだけである。

この背景には、日中戦争開戦から始まった各分野の統制が、いよいよ強まってきたということがあった。神奈川県では、ダンスホールやカフェーの取締が強化され、一九三九年一二月一日には、風俗営業関係の取締規則が一斉に改正されて、営業時間の制限と月一回以上の休業日を設けることが規定された（『横浜貿易新報』一九三九年一一月二六日）。

日中戦争開戦前から行われてきた風俗・風紀取締の強化に加えて、戦時体制のもとでは、物資・資源の節約に重点が移っていった。いずれの規則改正も、表面的には働く者に休日を与えるためとうたわれていたが、実質的には営業制限であった。これらによって、ダンスホールは休業・廃業が相次ぎ、一九四〇年中に横浜市内のダンスホールはすべて閉鎖される。百貨店・商店も、一九三八年一〇月一日制定の商店法によって、営業時間が徐々に制限されていった。

一方、映画に関しては、一九三九年一〇月一日施行の映画法によって、事前検閲と上映許可、文化映画・教育映画上映の強制、外国映画上映の制限などが課されて、内容と興業両方に対する管理・監督が強化された。横浜市内では、翌年一月から各映画館で一日一本の文化映画を上映することが、県保安課によって定められた（『横浜貿易新報』一九三九年一二月二三日）。

日中戦争開戦後も続いていたナイト・ショーも、風紀上存廃が議論されるようになり、一九四〇年三月には上映時間の制限を受けて全廃された（『横浜貿易新報』三月三日）。

こうした制限が、一九四〇年以降、川口家の人びとを伊勢佐木町あるいは映画館から遠ざけたのではないかと思われる。映画の内容や洋画が少なくなったことによって、興味が減退したことも考えられる。さらに地域では、金太郎が、一九四一年に隣組長に就任するなど、戦時体制下の様々な行事・団体に関わり、忙しくなった様子が、短い日記の記述からもうかがえる。

また、勤務先の子安国民学校は、一九四四年八月に集団疎開し、金太郎は一〇月から東京急行鶴見青年学校に移る。さらに翌年三月以降、各学校の授業が停止されることになると、金太郎は教員を辞め、県の嘱託職員になる。移動映写（巡回映画）を担当し、映画館には仕事でよく行くようになった。

そのため、一九四四年・四五年には、個人的に映画館に行ったとはっきりわかる記述はほとんどなくなる。こうして、戦前における川口家の人びとの映画館通いは、戦時体制に飲み込まれていったのである。

戦後の映画館の復興

戦後、横浜の映画館の復活は、早かった。当時一六歳の小黒英夫の日記には、一九四五年八月二八日に伊勢佐木町に行ってみると、オデオン座はやっていなかったが、横浜宝塚劇場で「北の三人」をやっていたので見たという記述がある。確認できる限りでは、最も早い記録である（『横浜の空襲と戦災２　市民生活編』）。

「北の三人」は、航空基地で通信士として働く女性たちを描いた戦争映画で、原節子や高峰秀子らが出演していた。八月初めに、公開されたばかりだった。一般に映画館は戦後、全国一斉に一週間休館し、再開後は戦意高揚映画の上映を自ら禁じたといわれている（中川右介『文化復興　１９４５年』朝日選書、二〇二〇年参照）。「北の三人」は、中断

敗戦直後の横浜宝塚劇場　1945（昭和20）年9月頃
「伊豆の娘たち」と「花婿太閤記」のチラシが貼ってある。
横浜の空襲と戦災関連資料

はあったかもしれないが、二九日まで続映されていたようだ。

戦後、最初に公開された映画は、「伊豆の娘たち」と「花婿太閤記」であったという。『朝日新聞』には、八月一九日に「伊豆の娘たち」、二〇日には「花婿太閤記」も加えて近日封切の広告が掲載されている。そして、八月三一日付『毎日新聞』は、「三十日より上映」の広告を掲載していた。

こうして戦後、映画館が再開していった状況を、今度は小黒英夫という若者の日記から見ていく（日記は小黒英夫家資料）。小黒英夫は、蒲田工業学校を卒業したばかりで、井土ケ谷上町の日邦工業に勤め、近所に住んでいた。軍国少年だっただけに敗戦に衝撃を受けながらも、若者の柔軟さでいち早く価値観を転換させていった。

映画においては、ニュース映画が戦争の実相、世界情勢の実情を知らせてくれ、そして技術的にも内容的にも質の高い洋画にのめり込んでいく。

一九四五年・四六年は、まだ戦後生活の再建もままならず、月に一、二度の映画館通いだった。四五年中は、横浜宝塚劇場を中心に邦画や、舞踊・音楽などの実演を楽しんでいたが、翌四六年から洋画を見始める。同年は、一三回映画館に行っているが、洋画はまだ五本だけだった。

たとえば三月一一日、横浜日活に行って邦画を見ているが、それは今ひとつという感想で、ニュース映画に大いに刺激を受けた。日本ニュース、新世界ニュース、ユナイテッドニュースの三本を見たが、なかでもユナイテッドニュースを「見もの」と表現し、沖縄戦やイタリアのムッソリーニの映像に、「久方振りのアメリカのニュース」、「さすがアメリカならではと、感心し」ている。

洋画の隆盛

洋画は、始めは戦前の古い映画が多く、小黒もそれほど興味を示していなかったが、一〇月一二日に横浜日活で見た「雨ぞ降る」は、再映ではあったが、地震や洪水、雨の映像効果に「さすが洋画だと感心」した。また、同時上映のユナイテッドニュースでは、ビキニ環礁での原爆実験の実写映像に感銘を受け、それに比して日本の新世界ニュースを「貧弱」と評している。

この間に、小黒英夫は日邦工業を辞め、ヂーゼル自動車を経て一九四七年一月から近所の町工場である水道工機製作所に就職した。ここで、小黒は旋盤の技術を身につけ、収入も増えた。その分、映画館に行く余裕もできて、八月までに三五回映画館に行っている。内五日は一日に二つの映画館に入った。洋画は一八本だった。なかでも三月九日、前年八月に開館した洋画専門のレアルト劇場で見た「空の要塞」では、アメリカ映画ならではの恋のロマンスとスリルに胸をわくわくさせた。

とくに効果的な撮影技術には、強い関心を示した。また、一〇月三〇日にオデオン座で見た天然色映画「ステート・フェア」では、「まるで夢見ている様な一時間半だった。」、「暫し吾を忘れた。」と、ストーリーと映像の美しさに魅了された。

この年は、九月以降の日記がないので、後半の映画館通いの様子はわからないが、翌年も映画館通いは続き、二一回の記録がある（内少なくとも一五本は洋画）。しかし、八月一一日の日記に、すでに二五本を見たとある。前の年も、日記には八月までに三五回とあるが、この日の日記では四六本見たと回想している。日記には相当数の記入漏れがあり、二本以上見た日も多かったのだろう。

前の年七月にラジオを購入すると、今度はラジオの決まった番組を聴くのが日課になり、少し映画館通いが減ったのは確かなようだ。興味深いのは、四八年二月二八日と三月三一日に、映画のトーキー試写として、映画の音声のみを放送している。聞いてみると面白そうなので、映画館に見に行きたいと書いている。宣伝効果をねらった試みだったのかもしれない。ただし、小黒の日記ではこれ以降は出てこない。

こうして、戦後、若者は洋画を中心に映画に魅了された。小黒は一九四七年三月一二日の日記に、「アメリカ映画は新世界の目だ、耳だ！」と記している。一方で、同年七月七日に黒沢明監督の「素晴らしき日曜日」、翌年五月九日に同「酔いどれ天使」と、戦後日本映画の名作も見逃してはいない。そして、邦画の中では例外的に、評価している。

他方、川口家の人びとは、戦後二年間に映画に行ったという記述があるのは四回だけである。金太郎が移動映写の仕事に忙しく、記録がないだけかもしれない。一九四七年・四八年には、再び月一度程度伊勢佐木町の映画館に行っている。たとえば、八月二六日にグランド劇場で「ターザンの逆襲」、翌年一月二三日にはレアルト劇場で「凸凹宝島騒動」を見るなど（小黒も前日二二日に見ている）、洋画も見ている。

しかし、一九四八年一〇月以降、川口家の人びとは、もっぱら生麦町の千代田館で映画を見るようになり、わざわざ伊勢佐木町には行かなくなる。これは、映画館も増えて、幅広い年齢層が多様な映画の楽しみ方をするようになったことを示しているのではないだろうか。こうして戦後映画は、黄金期を迎えるのである。

（羽田博昭）

昭和二〇年代初期の史蹟めぐり

第二次世界大戦後、日本の民主化のための「健康で文化的生活」が喧伝され、行政においてもスポーツや文化事業が戦前とは違った理由付けにおいて進められた。一九四七（昭和二二）年四月、横浜市長に当選した石河京市は、当選当初のインタビューにおいて、市役所に文化部を設立する、文化都市の建設などへの意欲を答えている。

このような中で多様な文化事業が行われ、その一つとして、同年、史蹟めぐりも計画された。この史蹟めぐりはハイキング的な側面もあり、徒歩により史蹟をめぐる計画であった。史蹟めぐりは第二次大戦前においても行政が関与して行われていたが、戦後も新たな装いをまといつつ行われようとしていた。また、その他のハイキングも盛んに行われており、当選早々の石河市長が、あるハイキング行事に参加していることなども報道されている。

ここでは、一九四七年に市文教部↓教育局が計画したハイキング的要素がある二つの史蹟めぐりについて紹介しよう。

市民ハイキングコース選定

一九四七（昭和二二）年の初めには、文教部社会教育課により市民ハイキングコースの選定が行われている（「史蹟めぐり」横浜市各課文書七九七）。これは「市民の情操陶冶と体育の健全なる向上と併せて市内の名勝史蹟を普及認識させる目的」であり、ハイキングで史蹟めぐりをするためのコース設定であった。

最初と思われる会議は三月二八日に予定され、文教部長・社会教育課長・主事・史蹟係書記・体育係嘱託・経済局庶務課長、また市役所外から横浜観光協会の主事、復興会の主事が出席している。横浜市復興会は、一九四五年、神奈川県商工経済会の平沼亮三会長を会長として、元横浜商工会議所会頭や元市長等を常務委員として復興計画や観光や其他について陳情を行っていた。横浜観光協会はこの復興会などによって組織されている。この会議では「市民ハイキングコース募集に関する件」が議題となった。

次の会議「市民ハイキングコース設定打合会」は、四月二二日に予定されている。横浜市からは文教部長・社会教育課長ほか四名、外部からは横浜観光協会主事ほか二名、また、今回から神奈川新聞社文化部長が参加し、計一〇名が参加する事となっていた。打合会では「市民ハイキングコース選定に関する具体的打合せ」が協議事項となっている。この打合会により、次の一〇のコース案が決まり、選定募集の起案が同日に作成された。

主催は横浜市・横浜観光協会、後援は神奈川新聞社で、以下の主に郊外部の一〇箇所がコース案であった。

①小机城跡コース
市電六角橋―長遠寺―八王子街道―小机駅―城址―菅田―羽沢―豊顕寺

②綱島より三つ池コース
東急（大倉山）―大倉山文化科学研究所―太尾公園―大綱橋―長松寺―三つ池―総持寺―鶴見駅

③都筑丘陵コース
中山（省線）―川和富士―川和八幡―市ケ尾古墳群―荏田―新羽―東急大倉山駅

④万騎ヶ原コース
中山（省線）―旧城寺―白根不動―鶴ヶ峰―万騎ヶ原―二俣川駅

⑤境木より豊顕寺コース（武相国境）
保土ヶ谷駅―桜ヶ丘―権太坂―戸塚トンネル上―西谷浄水場―星川―岡野公園―豊顕寺―横浜駅

⑥湘南アルプスコース
東急市電杉田―円海山―氷取沢―峰灸寺（護念寺）―鎌倉天園―鎌倉アルプス―半僧坊―建長寺―円覚寺―北鎌倉駅

⑦金沢鎌倉コース
東急金沢八景駅―九覧亭―瀬戸神社―金沢文庫―称名寺―能見堂跡―鎌倉天園―鎌倉宮―鶴岡八幡宮―鎌倉駅

⑧神武寺コース
金沢八景―神武寺―鷹取山―追浜

⑨日野永谷コース
上大岡―日野―永谷―舞岡―柏尾―戸塚駅

⑩朝比奈コース
金沢文庫―八景―朝比奈切通―鎌倉

なお、東急杉田駅・東急金沢八景駅は現在の京浜急行電鉄杉田駅・金沢八景駅のことで、一九四二（昭和一七）年戦時統制により東急・小田急・京急が合併し東京急行電鉄となり、当時は分離する前であった。

またこれ以外の新コースの要望があれば、「1コース名、2順路、3所要時間、4経費、5粁数」を記載して「（自由）希望コース」と明記して応募するようになっていた。応募の締切は五月末日、発表は六月初旬に神奈川新聞紙上に掲載される予定であった。一番多くの応募があったコースに応募した者（一〇〇名以上の場合は抽籤）には薄謝（バッヂ）が観光協会より進呈される予

峰の灸（磯子区）1976年　広報課写真資料6469

定であった。

この募集の広報は神奈川新聞紙上で行われる予定となっていたが、四月末から五月初めにかけては衆議院議員選挙と地方議会選挙が立て続けにあり、直ぐには記事が掲載されなかった。掲載は五月三日が最初で「平和日本の再建は体位の向上から」と「新憲法施行を記念するいろ〳〵な行事と並んで」、先の目的から「市民ハイキングコース」の選定募集を行うようになったとあり（『神奈川新聞』一九四七年五月三日）、起案には憲法については記載されていなかったが憲法の施行に合わせて記事は掲載された。

この募集の結果は六月七日の『神奈川新聞』に掲載された。六月五日付の「市民ハイキングコース選定募集発表に関する件」も併せて見ると、当選したコースは⑥湘南アルプスコースで、投票総数は分からないが抽籤により一〇〇名にバッヂが贈られることになった。二位は②綱島三ツ池コース、三位は⑧神武寺コース、同じく三位で⑦金沢鎌倉コース、四位は③都筑丘陵コースとなった。一位と三位に鎌倉を含むコースとなり、市内よりも鎌倉の寺社が人気があったようである。

選定されたハイキングコースは、六月一五日にハイキングの実施が予定されていた。告知の記事では（『神奈川新聞』一九四七年六月一三日）、参加者は午前八時から九時の間に出発地点の東急杉田駅前に集合し、各自が自由にコースにある進路標識に随って、杉田駅、杉田梅林、円海山、峰の灸、鎌倉天園へとハイキング、そこで午後一時から藤井典明による歌唱指導、歌曲演奏、横浜ボーイスカウトによるゲーム演技を行い、「多彩な市民リクリエーションを展開して一日を楽しく過して解散する」予定であった。後半の鎌倉におけるハイキングは実施するかどうかは記事では判明しないが、鎌倉天園で解散となっているので組み込まれなかったようである。

しかし、ハイキング実行の当日である六月一五日はあいにくの雨天となり、延期を余儀なくされた。紙上では「改めて日程を決定の上、広く一般からの参加を求めることになった」と報じられている（『神奈川新聞』一九四七年六月一六日）。

ところが、この後、『神奈川新聞』紙上に、市民ハイキングの告知が一ヶ月経っても掲載されなかった。横浜市『昭和二十二年　事務報告書』でも「市民ハイキング選定準備会開催」二回は記載されているが、実施したとの記載は無く、コースは決めたものの結局は実施することなく終わっている。

表1 横浜市史料調査委員会　1947年９月

役　職	名　前	摘　要
委員長	石河京市	横浜市長
副委員長	三谷重忠	横浜市助役
委　員	軽部三郎	前市会議員
委　員	軽部亀松	地主
委　員	添田坦	地主
委　員	安藤政信	前県会議員
委　員	飯田九一	画家
委　員	吉谷華圃	画家
委　員	熊原政男	金沢文庫長
委　員	河西春海	港北区長
委　員	佐伯藤之助	市民生委員
委　員	中島満洲夫	保土ヶ谷中学校長
委　員	相沢宇平太	地主
委　員	海老沢有道	医専講師
委　員	竹内芳衛	医師
委　員	石原明	医師
委　員	三森達夫	美術研究家
委　員	池谷健治	考古研究家
委　員	岡本孝正	図書館長
委　員	長谷川達成	職員課勤務
委　員	石井光太郎	社会教育課勤務
委　員	関戸小一	栗田谷小学校教官
委　員	小沢達蔵	南太田中学校教官
顧　問	関靖	前金沢文庫長
顧　問	石野瑛	武相中学校長
顧　問	中道等	生活科学指導所長
顧　問	佐藤善治郎	神奈川高女校長
顧　問	朝比奈貞一	文部省科学研究所、理学博士
顧　問	丹波恒夫	貿易商
幹　事	彦由亀一	教育局長
幹　事	玉岡三男	社会教育課長
幹　事	井筒広海	計画課長

出典:1947年９月20日発議「史料調査に関する件」
（「史蹟めぐり」、横浜市各課文書 No.797）。

横浜史蹟めぐり選定

この直後、同年八月には横浜市史料調査委員会の原案により、同じく文教部社会教育課が「横浜史蹟めぐり」選定を企画している。史料調査委員会は、大正から昭和にかけての横浜市史編纂が終了（『横浜市史稿』刊行）の後、一九三四（昭和九年）に史蹟・名勝・史料等の調査のため組織された横浜史料調査委員会（一九四三年に横浜市市民博物館評議委員会に改組）の系譜をひく組織で、一九四六（昭和二一）年一二月、「再発足」のための会合の案内が送付されている（朝比奈貞一資料三〇）。この案内は資料調査委員や顧問となった人々に送付されたものと思われる。翌四七（昭和二二）一月には「横浜市史料調査委員会規程」が定められている（庁達第一号、『横浜市報』一九四七年三月二七日）。同年九月における委員・顧問等は表1の通りで、朝比奈貞一は顧問となっている。

先ず八月一二日には、起案「「横浜史蹟めぐり」選定に関する件」（前掲横浜市各課文書七九七）が作成されている。これは「横浜市内の史蹟の普及宣伝を計り併せて市民の啓蒙に資する為」に発案されている。この内容は、先の市民ハイキングの目的の後半部分とほぼ同じ目的であった。なお後述の開催の起案では、目的を「市民の情操陶冶と健全なる教養の向上を計り併せて市内の名勝史蹟を普及認識させ生活のうちに融合させる」とする。

次に、史蹟めぐりの「具体的実施策を決定」する会議が、八月二〇日に予定されている。この会議には、社会教育課長のほか、経済局庶務課長、観光協会長・主事、史料調査常務委員（石原・池谷・中島・三森・関）、復興局計画課長が出席予定者であった。先の市民ハイキングの会議から社会教育課体育係や復興

会主事が外れ、新たに復興局計画課長が加わり、また史料調査委員会からは五名が出席予定であった。復興局都市計画課長は教育局長・同局社会教育課長・経済局商工課長（観光事務主管課長）と共に史料調査委員会の幹事であった。なお、八月一日に文教部は教育局に改組されている。

この会議で史蹟めぐりを行うことが決まったようで、九月二日、史料調査委員会による小机の雲松院・泉谷寺調査の依頼状に関する起案「史料調査に関する件」では、「本件は来月開催の史蹟めぐりの下調査を兼ねる」としている。具体的な調査順路は、小机駅―雲松院―小机城址―村岡氏宅―泉谷寺であった。

九月三〇日発議の開催伺起案「史蹟めぐり開催並に前渡資金伺ひの件」には具体的な予定が書かれている。これによると、史蹟めぐりの期日は一〇月一二日、雨天の場合は一週間後の一九日に予定され、集合場所・時刻が横浜線小机駅前に集合、午前十時出発、見学コースは小机駅―三会寺―雲松院―小机城址―泉谷寺で、「途中村岡、沼上氏宅広重の絵、原橋氏宅にて古文書拝見の予定」であった。現地での説明は史料調査委員が当たり、テキストとして約一〇〇部を配布するとしている。主催は、横浜市と神奈川郷土文化会、昼食は各自持参等となっている。

この史蹟めぐりの広報は新聞等では行われていないようで、同じく九月三〇日発議の起案では、市内各小学校長・中学校長宛の案内が作成されて配布される予定であった。

また一〇月八日には、各見学先宛に「貴寺（貴宅）に参上、宝物を拝見いたし（ママ）したく」依頼状発送の起案があり、委員宛にも参加の依頼状が作成されている。この中で「小田原北条文書、広重肉筆画、シャム伝来の仏像仏具等」を見学すると記されている。

史蹟めぐりは、一六日付の感謝状発送のための伺を見ると、予定通り一二日に行われたが、参加人数等の具体的な内容は判明しない。感謝状は三会寺・雲松院・泉谷寺・沼上左右・原崎（ママ）伊助・村岡愛作に贈られる予定であったので、案内の通りにこれらの寺院・個人宅を見学したのであろう。また参加者は先の学校宛案内があるように教員が大多数だったと思われる。

雲松院裏山の笠原氏の墓所（港北区）1979年　広報課写真資料7687

弘明寺観音（南区）1977年　広報課写真資料6879

続いて一一月には、次の史蹟めぐりが計画されている。一一月七日発議、一三日決裁の「史蹟めぐり開催並に前渡資金伺ひの件」では、日時は一一月二三日（日）、雨天の場合は三〇日（日）、〔湘南弘明（ママ）寺駅〕前に午前九時集合、弘明寺・薬王寺で国宝観音・古美術鑑賞の計画であった。

同起案の小学校長・中学校長宛の通知案では、見学コースは弘明寺（南区）―薬王寺（磯子区田中町）―杉田となっている。現地における説明は三森達夫が担当する予定であった。また各委員宛では解散が午後四時となっている。

この第二回も日程通り一一月二三日に開催され、二八日には感謝状発送の起案が作られている。

このように史蹟めぐりは二回行われたが、広報は学校関係が中心と思われ、市民ハイキングのように神奈川新聞が関与していなかったためか市民に広く行われなかったようであり、参加者は教員が主であったと思われる。その分、史蹟については、より専門的な解説も行われていたようである。

＊　＊　＊　＊　＊

一九四七（昭和二二）年には、ふたつの史蹟めぐりが計画され、後者の横浜市史料調査委員会が発案した史蹟めぐりが二回行われている。ところが、これ以降は、この計画による史蹟めぐりは行われなくなった（『昭和二十三年事務報告書』など）。

しかし、この後も史蹟・名勝に関することは文化財行政として途切れることなく行われており、また市の歴史に関することは、歴史年表や横浜市史の編集などが計画され実行されていく。

【参考文献】
『横浜市史Ⅱ』第二巻（横浜市）一九九九年、松本洋幸「戦間期の市史編纂事業―『横浜市史稿』の編纂過程」（『横浜開港資料館紀要』一九号）二〇〇一年、同「一九三〇年代の横浜市政と史蹟名勝保存」（大西比呂志 他編『「大東京」空間の政治史　一九二〇～三〇年代』、日本経済評論社）二〇〇二年、平井誠二・林宏美『わがまち港北3』（『わがまち港北』出版グループ）二〇二〇年。

（百瀬敏夫）

横浜国際婦人会
(Yokohama International Women's Club)

横浜国際婦人会は、横浜が関東大震災の被害から復興した一九二九年に創設されて、今年で九二年になる。同会の資料が横浜市史資料室に寄贈される予定となり、現在整理作業を進めている。ここでは、一九六〇年までの議事録などから、同会について紹介したい。

外国人居留地の置かれた横浜には、明治時代から外国人による複数の社交クラブが存在した。現在でも活動しているクラブのなかには、一八六八年横浜クリケット・クラブとして創立した横浜カントリー・アンド・アスレチック・クラブ(YC&AC)や、一八七八年にイギリス女性たちが創立したレディース・ローン・テニス・アンド・クロケット・クラブを引き継ぐ横浜インターナショナルテニスコミュニティなど、スポーツを楽しむ団体がみられる。横浜国際婦人会は、そのような外国人による社交クラブの一つであった。

横浜国際婦人会創設の頃

横浜国際婦人会(当初International Women's Club of Yokohama。以下、「YIWC」と記載)の設立当初は、横浜に住まう多国籍の女性たちが様々な文化や教養にふれる機会を楽しみ、お互いに交流する場を提供する社交クラブであった。モーコーク夫人(Mrs. Mocock)が初代会長であるが、その頃から戦時中にかけての資料は残されていない。

一九三九年から翌年にかけて会長であったミコークル夫人(Mrs. McCorkle)が後に記した手紙によると、一〇月から翌年五月までを年度とし、ホテル・ニューグランドで月二回の会議を行なった。時にはミキモトの真珠養殖場や絹織物工場などの見学会、歌舞伎などの観劇も企画したという。

YIWC理事会のメンバーについては、居住外国人の人名録(*The Chronicle Directory*)に記載がみられる。一九三八・一九三九年版には、会長のアメリカ領事ボイス夫人(Mrs. Boyce)をはじめ、副会長、記録係、会計など六名の名前が記されている。当時ホテル・ニューグランド会長だった野村洋三から施設を提供され、ホテル中二階の「グリーン・ルーム」に図書室を設けていた。司書のジャクソン夫人(Mrs. Jackson)の名前も見られる。一九四〇年版は、同ホテルを所在地として会長ミコークル夫人以下五名が、一九四一・一九四二年版には、会長ラパー夫人(Mrs. Lapper)以下八名が掲載されている。

軽井沢への移転と蔵書

一九四三年、戦争の激化にともない公布された「外国人ノ旅行等ニ関スル臨時措置令」の一部改正により、外国人の絶対居住禁止区域(甲地域)が指定され、地域の外国人は全て強制移転することになった。『外事月報』一九四四年八月分(内務省警保局外事課)には、外国人の「移転先調」が掲載されている。それによれば、夫人がYIWC理事会に所属したアプカー(M.Apcar)一家五人は一九四三年一一月二五日に、同様にファクトマン(T. H. Fachtmann)夫妻は一九四四年五月六日に、軽井沢に移転していることがわかる。外国人たちの軽井沢での生活は、寒さと食糧不足などにより、過酷なものだった。

ファクトマンは後年、一九六六年二月一四日付副会長宛の書簡に、YIWCの蔵書を軽井沢に移転した経緯について記している。一九四四年当時、ファクトマン夫人は移転した外国人たちが利用できるように、蔵書をホテル・ニューグランドから軽井沢に移すことを希望した。物資や労働力不足のため運搬は困難であったが、野村洋三の尽力により移転することができた。図書室は寺院の一角に設けられた。一九四六年に夫人はアメリカに帰国し、後に残ったファクトマンが蔵書を引き継いで、図書室はしばらく開室していた。その後、軽井沢の自宅に移動し保管された蔵書は、劣化が進んで失われてしまったという。

コロニアル・ウィメンズ・クラブ
(Colonial Women's Club)

YIWCの活動は、戦争の間中断していたが、一九四八年一一月四日に再開された。コロニアル・クラブ(横浜アメリカ文化センター、ユナイテッド・クラブに変更の後、現在は神奈川県民ホール)で会合が開かれたことから、コロニアル・ウィメンズ・クラブという名称となった。ジョンソン夫人(Mrs. Johnson)が会長に選出された。会員の条件は、配偶者がコロニアル・クラブの会員か加入が許された外国人女性に限られた。半数の会員の配偶者が軍関係者だった。会議では月二回木曜日に会合を開くこと、クラブの目的をチャリティーとすることが決められた。

手はじめに、横浜に駐留した米国第八軍の協力を得て、キャンプの一八箇所に赤く塗った樽を設置し、その中に金品を入れるという方法で、寄付を募った。その結果、合計二、一一二ドルと一五万円余が集められた。五二の施設、一七〇〇人の子供たちに、四二〇〇着の衣類、五〇〇足の靴、四四〇個のおもちゃ、二三ケースの食料品を提供することができた。日本向けの援助物資を提供したララ(アジア救援公認団体)のミルク基金にも、寄付を行なった(図一)。

LARA
Licensed Agencies for Relief in Asia

図1:LARAミルク基金受領書
1949年12月29日(YIWC所蔵)

日本人の会員とともに

一九五二年に講和条約が発効し、占領が解除された。ＹＩＷＣの会合は六月からＹＣ＆ＡＣ、ヨコハマ・ヨットクラブ、ヨコハマ・ユナイテッドクラブで開催するようになった。名称も七月の会合からヨコハマ・ウィメンズ・クラブ(Yokohama Women's Club)と変更し、さらに一九五六年四月から、現在まで続くヨコハマ・インターナショナル・ウィメンズ・クラブと改称した。

一〇月には規約を改訂し、会員資格を「英語の実用的な知識を持つ女性」と変更した。この時から、外国人だけでなく日本人もＹＩＷＣに加わるようになり、翌年四月の会議では一名の新会員(Hideko Ohno)が紹介された。一八六〇年の名簿には、一三四名の会員のうち、二五名の日本人が確認できる。

アメリカ留学を支援

ＹＩＷＣは、横浜アメリカ文化センター(在日アメリカ大使館管理)が一九六七年に閉館されるまで、外国語学習の協力機関となった。

同センターは、一九五二年に横浜ＣＩＥ図書館(連合国総司令部民間情報局横浜図書館)を引き継ぎ、日米文化の交流機関となった。所在地は、シーメンズ・クラブ(海員会館、北仲通)、南里貿易ビル(山下町)、旧コロニアルクラブ(山下町四番地)と移転した。連日およそ一〇〇人の利用者が来館した。図書の利用のほかに、ほとんど毎日のように映画会、レコード・コンサート、展覧会などが開催されて、アメリカ文化を日本に紹介した。

なかでも好評だったのが英会話教室で、ＹＩＷＣ会員を含めボランティアが講師を勤めた。一九五六年九月のＹＩＷＣ議事録に、同センターから英会話講師のボランティア派遣を打診されたという記載がみられる。この教室には大学教授、中・高等学校の英語教諭、官公吏、学生、警察官、会社員などが通い、年間三〇〇から四〇〇名ほどが修了した。同センターが配布した『アメリカ留学案内』という小冊子には、毎週木曜日の午後三時半から五時まで、ＹＩＷＣ会員が留学相談に応じているので、気軽に利用してほしいと書かれている。

さらにＹＩＷＣは、一九五六年頃に、サンフランシスコに留学生受入のための体制を整え、学生の居住場所を探すなどの支援を行なった。

図2：アザレア・ツアーの庭園地図
1957年4月30日(ＹＩＷＣ所蔵)

アザレア・ティー

このころ、日本人の留学資金にあてるべく、「アザレア・ツアー」を開催した。アザレア(つつじ)の花が咲く季節に、横浜の根岸や山手に住まう会員の庭園と、外国人が利用する施設に案内し、花とお茶を楽しんでもらい、寄付を募るという企画であった。図２は一九五七年四月三〇日に開催された時のツアー・マップである。会員の庭園のほか、アメリカ領事館庭園やレディース・ローン・テニス・アンド・クロケット・クラブの六箇所を案内しており、翌年は巡回場所を、七箇所に増やしている。

この企画はのちにＹＩＷＣの主要なチャリティー・イベント「アザレア・ティー」に変わり、ホテル・ニューグランドなどを会場に、お茶とファッション・ショーや音楽などの催しを楽しむ会が現在も続けられている。

会員の企画

一九五七年から、毎月の定例会もホテル・ニューグランドで開催するようになった。

ファッション・ショーは、チャリティーだけでなく、会員が楽しむためにも行なわれた。一九五四年には毛皮ショー、一九五五年には着物ショーが開かれ、新聞に取り上げられた。図３は一九六〇年に高島屋とＹＩＷＣの共催で行なわれたファッション・ショーの写真で、会員がモデルとなった。

以上のようにＹＩＷＣは、戦後の横浜において、チャリティー活動を行ない、国際交流に携わってきた。

横浜市史資料室では、同会資料を中心に展示し、紹介する予定である(室内展示―二〇二二年一月中旬から四月上旬まで)。

図3：ＹＩＷＣ・高島屋共催 春のファッション・ショー 1960年(ＹＩＷＣ所蔵)

【参考文献】
大山瑞代「アルメニア人アプカー一家の三代記」(横浜外国人社会研究会・横浜開港資料館編『横浜と外国人社会―激動の２〇世紀を生きた人々』第５章　日本経済評論社、二〇一五年)。
沓掛伊佐吉「横浜アメリカ文化センターの開設から閉館まで」(『神奈川県図書館協会報』第六一号　神奈川県図書館協会、一九六七年)。

(上田　由美)

閲覧資料紹介
横浜カオスの中に文化をさぐる
―横浜市民特性の基礎調査―

本書は共同デスクＹＯＫＯＨＡＭＡが一九八六年に刊行した調査報告書である。この共同デスクは横浜で活動する音楽プロデューサーの星野東三男、出版会社を経営する塚井楯彦、編集者の中西昭雄の三名からなり、連絡先は星野の事務所の気付となっていた。

調査の趣旨は「市政一〇〇周年記念事業の基本理念―市民の多様な表情を組み込んだ手づくりの祭り―の実現に向けて、横浜市民意識の特性をさぐる」ことだが、一九八五年に三〇〇万を超えた「横浜市に住む住民の意識を把握するのは不可能に近い」という。この「三〇〇万人カオス状況」からある種の共通項をさぐるためには、「歴史的に形成されてきた特性と現在の進行しつつある意識傾向」のすりあわせが必要であるとする。そこで新しく生まれつつある市民の特性を五つの側面から接近し、また横浜に関する有識者の話から歴史的特性の概要をまとめたという。

総論となる『『横浜（ハマ）』の解体と蘇生』では、当時の市民意識が「ミナト」の横浜と「都民」の横浜に二分されており、これを「ヨコハマ」と「横浜」の対抗と位置づけている。そして緑と港の風景を共有し、「横浜時間」を尊重することが、新しい市民意識の特性を育むことにつながるとした。

これに六編の記事が続く。「リサイクルと自然保護からみた市民意識」では、東京よりも緑が多く残っていた東急田園都市線沿いに暮らす市民の声を紹介し、環境保全のための実践としてリサイクル活動をとりあげる。「都市型ボランティアと主婦達」では、横浜の高度成長を支えた世代が老齢となり、その介護が社会課題となり始めたことを指摘し、福祉の現場にボランティアとして参加する主婦達の姿を記している。「塾講師のみた緑区の子供たち」では、テレビゲームに熱中し、進学のための学習塾に通う子供の姿を取り上げる。「ファーストフードの女子高生たち」は、たまプラーザ駅前にあるケンタッキーフライドチキンに集まる女子高生を取材する。「はみだしヤングのハマっ子意識」では、暴走族やミュージシャンなど、世間からはみ出した若者の横浜への意識をインタビューしている。最後に「『ハマっ子』の歴史的考察」では、横浜文芸懇話会の内田四方蔵が「ハマっ子」イメージの歴史的変遷を文献にもとづいてまとめている。

本書は、一九八〇年代中頃のさまざまな市民の声を記録しており、現在にとって歴史的な意味を持ち始めている。閉架の図書だが請求すれば閲覧・複写できるので、興味のある方には一読をおすすめしたい。

（金耿昊）

《市史資料室たより》

【令和３年度横浜市史資料室室内展示】
「ハマの二宮金次郎
～小学校の金次郎像たち～」

会期：開催中～令和４年1月12日（水）
時間：午前９時30分～午後５時
◎入場無料
会場：横浜市西区老松町１番地
横浜市中央図書館地下１階
横浜市史資料室
内容：2010年に神奈川県土地家屋調査士会が調査した、横浜市内小学校に残っていた二宮金次郎像の写真と、関連資料を紹介します。
◎予告　次回市史資料室室内展示
「アザレア・ティーと横浜国際婦人会」
会期：令和４年１月中旬～４月上旬

【展示会「戦後横浜－それぞれの出発」が終了しました。】

①展示会（7/15～9/23）
昨年同様に、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策をとって開催されました。戦時中・戦後の幅広い世代、女性や元兵士の日記等を紹介する展示会でした。「一回で読み切れない」という声が聞かれるほどボリュームがありましたが、「戦後の風景」の写真や「8/15の日記」、「女性たちの戦後」に多くの方が関心を寄せられ、好評のうち終了しました。

②展示関連講座（9/11）
「戦中・戦後の日記を読む」

参加者31人、横浜市中央図書館地下１階ホールで開催されました。「日記は体験を語り伝える貴重な資料」、「戦時下、終戦直後の庶民の生活や意識の変化を知る事ができ、有意義だった」等の感想をいただきました。歴史資料としての個人の日記の価値を見直す講座となったようです。

【寄贈資料】

1.田中一郎　様　2点
田中一郎家資料追加
2.五大路子　様　274件
五大路子資料追加
3.青木由江　様　3点
横浜市潮田尋常小学校卒業アルバム他
4.八木宏美　様　63件
八木和子家資料追加
5.内藤惇之　様　218件
都市計画関係資料等

【横浜市史資料室のご利用について】
現在横浜市史資料室の利用は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため予約制となっております。事前に電話・Eメール等で利用方法をご相談ください。

◇ 休 室 日 の 御 案 内 ◇
毎週日曜日及び12/20（月）、
12/29（水）～1/4（火）午前中、
1/11（火）、2/21（月）、3/22（火）

◆『市史通信』の編集は、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団　近現代歴史資料課　市史資料室担当職員が行っています。

リサイクル適性の表示：紙へリサイクル可